

パスパ文字漢語研究の黎明 - 19世紀西洋人の研究

中村雅之

1. 19世紀ヨーロッパのパスパ文字研究

中野美代子『砂漠に埋もれた文字』(ちくま学芸文庫、1994)によれば、西洋におけるパスパ文字研究は1839年のガベレンツ(Gabelentz)の研究に始まる。『石墨鐫華』に紹介されたパスパ文字モンゴル語碑文を対象とするものであった。それ以後しばらくの間、パスパ文字はモンゴル語を記すための文字と信じられていた。しかし1857年に(現在の)インドネシアでパスパ文字を記した貨幣が発見されてパリに送られ、1859年にアジア協会のポージェエ(Guillaume Pauthier)がそれを正しく「大元通宝」の漢語音であると解読して『アジア協会誌(Journal Asiatique)』に発表して以来、パスパ文字が漢語をも記していたのだということが知られるようになった。さらに1862年に同じくポージェエが「パスパのアルファベット(De l'alphabet de Pa'-sse-pa)」と題する論文を同誌に発表して以来、パリのアジア協会がパスパ文字研究の中心地になったという。以上が中野(1994)の説くところである。

要するに、19世紀ヨーロッパにおけるパスパ文字漢語の本格的な研究はポージェエに始まるということであり、その認識それ自体に大きな誤りはないと思われるが、パスパ文字研究史というさらに大きな枠組みで考えるならば、なお検討すべき課題が残っている。それは同時期における中国人の研究と、中国に滞在していた西洋人の研究である。前者については吉池孝一氏による最近の研究(『KOTONOHA』45号および46号所載論文参照)により実情が明らかになりつつある。ここでは後者すなわち19世紀中国における西洋人のパスパ文字研究について述べたい。

2. ワイリーとエドキンスの業績

管見の限り、パスパ文字漢語に関して研究と称するに値する最初の仕事をなした人物は、満洲語の研究でも有名な英国人ワイリー(Alexander Wylie)である。ロンドン宣教師協会の会員としてエドキンス(Joseph Edkins)と共に上海にあったワイリーは、1855年に「漢字とモンゴル文字の古代碑文(Ancient Inscription in Chinese and Mongol)」という重要な論文を『王立アジア協会中国支部紀要(Transactions of the China Branch of the Royal Asiatic Society. Hongkong)』に載せた。この論文は1294年の漢字とパスパ文字漢語による聖旨碑文を扱ったものであるが、パスパ文字部分の模写と共に全文の転写と翻訳が与えられただけでなく、『元史』のパスパ文字公布に関わる部分の翻訳、『欽定錢録』『選青小牋』『錢志新編』などの図録に載ったパスパ文字貨幣の解説、さらには『書史会要』のパスパ文字表(『続弘簡録』所載による)の提示や、「百家姓蒙古文」の紹介など、驚

くほど多くの資料に言及している。彼の業績が直ちにヨーロッパの学界に知られていたならば、ポージェエの研究は自ずと違う形になっていたはずである。

1855年の『王立アジア協会中国支部紀要』にはワイリーの論文のほかにエドキンズの論文も掲載されている。「サンスクリットの文字とモンゴルの文字 (Sanskrit and Mongolian Characters)」と題するもので、後半部がモンゴル文字すなわちパスパ文字についての論考である。この論文は非常に短く、全体が一種の要約という趣のものではあるが、パスパ文字がチベット文字を模範にしたこと、音韻史的な観点からパスパ文字漢語の体系が現代語の体系と近いことなどが明記されており、さらに『稗編』所収の「百家姓蒙古文」の模写が付されている。

ワイリーは多岐にわたるパスパ文字資料を余すところなく紹介するという点において力量を発揮したが、そのパスパ文字の構造および音韻史的意義の理解という点においては、エドキンズに遠く及ばなかった。エドキンズは早くも『官話文法 (1857)』において、元明代の北方音を論じる際にパスパ文字を利用している。「或」「国」「得」のパスパ文字表記を、「解読の困難な母音をこのように読むことが許されるならば」と但し書きしながらも、それぞれ「hwe」「kwe」「tei」と読んでいるし、さらに「百」のパスパ文字も「pai」と読んでいる。ワイリーが上掲論文で「百家姓」のパスパ文字表記を「ba ga sing」と転写したのは、明らかに音韻史的な知識の欠如を物語る。(「百家姓」は現代では通常「bay gīa sing」と転写される。エドキンズ風の綴りを用いれば「pai kia sing」ということになる。) もっともここでワイリーを責めるのは妥当ではない。カールグレンやマスペロによる精緻な漢語音韻史研究が始まるのはまだ半世紀も先のことである。むしろ、パスパ文字漢語を正しく近世北方音の体系の中に位置づけたエドキンズこそが、当時としては異常に早熟なのである。

一方、ワイリーはエドキンズにはない美点を備えていた。文字への愛着である。彼は貨幣の図録に記された不明瞭なパスパ文字の字形を、一つ一つ丁寧に標準的な書体に復元しており、これが極めて正確である。またほとんど判読不能な「百家姓蒙古文」の冒頭部分も標準書体に復元していて、これもわずかな誤りを除けばほぼ正確である。彼が「ba」「ga」と不可思議な転写をした「百」「家」についても、その復元した字形は完全に正しい(!)。標準書体の復元については、彼が碑文という依拠するに足る資料に接していたことが大きい。それに加えて彼のパスパ文字に対する尋常ならざる傾倒がそれを可能にしたと言えよう。彼は個人でもパスパ文字印章を所有しており、印章の文字が通常の手書と異なることにも気付いていた。あくまでも一つの言語学者に徹したエドキンズに対して、旺盛な好奇心を持った文字資料収集家の匂いがワイリーには感じられる。居庸関壁文の六体字経文を初めて紹介したのは外でもないワイリーで、東アジアの文字資料を追い続けた彼こそがその仕事に最もふさわしい人物であった。

3. ポーティエへの影響

Pauthier (1862) がヨーロッパにおけるパスパ文字研究に大きな影響を与えたことはすでに述べた通りであるが、この論文は主に次の三部分からなる。

- (1) 『古今圖書集成』「字学典」のパスパおよびパスパ文字関連部分の翻訳。
- (2) 『書史会要』のパスパ文字表(『続弘簡録』所載)の紹介と解説。
- (3) 1294年のパスパ文字漢語碑文の翻訳。

この内容は Wylie (1855) と非常に類似している。(1)については、ワイリーは『元史』を用い、ポーティエは「字学典」に引用されたものを用いているが、(2)と(3)は全く同じ材料である。特に(3)は上海のエドキンズからフランスのジュリアン(Stanislas Julien)に送られた資料がさらにポーティエの手に渡ったもので、まさにワイリーの用いた資料そのものであったと思われる。ポーティエ自身、ワイリー論文の存在を知っていたが、本人の記す所によれば、入手してはいなかったらしい。

いずれにせよ、ポーティエ論文がワイリーに遅れること7年にして成ったこと、そして内容的にはワイリー論文との重複が甚だしいことは記しておく必要がある。

4. 転写上の類似

ポーティエはワイリーの論文を見ずに同様の仕事をなしたという事であるが、パスパ文字表に与えられた転写(ないし音価)は互いによく似ている。36字母で「精/清/從」に相当するパスパ文字は、現在では通常「j/c'/c」(あるいは dz/ts'/ts)と転写されるが、ワイリーは「ts/ts'/ds」、ポーティエは「ts/th's/ds」とした。有気音の表示法が異なるだけで実質は等しい。また、微母に相当する文字は現在では「v」(あるいは w)と転写されるが、ワイリーは「ō」とし、ポーティエは「vō、aō、o」とする。両者において、この文字が何故に母音「o」に関連づけられるのか不明である。

このような類似が単に偶然であるのか、それとも両者に共通の基盤があるのかについては今後の調査課題とし、ここでは事実の指摘にとどめておく。